

國學院大學学術情報リポジトリ

『落葉集』の二つの訓

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 今野, 真二, Konno, Shinji メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000619

『落葉集』の二つの訓

はじめに

一五九八年にイエズス会によって印刷出版された『落葉集』は「落葉集」「色葉字集」（前篇）と「小玉篇」（後篇）との前後篇の二部構成を成す。あるいは、全体が三部構成を成すともみてもよい。

「小玉篇」は冒頭に「右落葉集は字のこゑを用ひていろはをついで色葉字集はよみを以て記すれば讀こゑを知て字のすがたをしらざる時の所用をなすといへども文字のかたちを見て其よ

今野真二

みこゑをしるに道なき便として右両編の内より今又此せばき玉篇をあみ畢」という「序」様の文章を置いており、その内容から、「小玉篇」が「落葉集」「色葉字集」を受けて編まれていることが明らかである。また現在所在が確認されている『落葉集』六本（イエズス会本部蔵本・大英図書館蔵本・スコットランド、クロフォード家蔵本・パリ国立図書館蔵本・ライデン大学図書館蔵本・天理図書館蔵本）のうち、パリ国立図書館蔵本とライデン大学図書館蔵本とは「小玉篇」を欠く。このことも「小玉篇」が「落葉集」「色葉字集」に遅れて編まれたことを示唆すると思われる¹。本稿ではテキスト全体の呼称としては二重鉤括

弧に入れた『落葉集』を使い、部としての「落葉集」と表示上区別をする。

『落葉集』については、豊島正之が「日本の印刷史から見たキリシタン版の特徴」(『キリシタンと出版』二〇一三年、勉誠社)において、「一五九八年のうちに、日本イエズス会は二千五百字を越える漢字活字の新鑄に至り、それらの「総見本帳」として、漢字字書『落葉集』を刊行した」(一五三頁)と述べている。本稿では、この豊島正之の言説を受けて、『落葉集』は、日本イエズス会が日本語テキストを活字印刷するにあたって使用することができた活字の「総見本帳」であったと前提したい。

日本イエズス会が印刷する日本語テキストが当該時期までの日本語のありかたと隔絶したものであるとは考え難く、当該時期までの日本語のありかたを何らかのかたち、なにほどの程度で反映したものと想定することがむしろ自然であろう。そうしたことについて、稿者はすでに「仮名文字遣からみた『落葉集』——「は」「わ」の場合——」(一九九五年『国文学研究』第一一五集、後、『仮名表記論攷』第二章第二節の五「仮名文字遣からみた『落葉集』」として改稿の上再収)において指摘した。そう考えると、この「漢字活字の総見本帳」すなわち『落葉集』はそれを編んだ日本イエズス会の人々、日本イエズス会の

活動にかかわっていた日本語母語話者の「日本語に関する知見の総見本帳」でもあることになる。

『落葉集』が「漢字活字の総見本帳」であるならば、漢字にたどりつくことが重要であることになる。『落葉集』は「漢字が検索できるテキスト」であることが第一義であったとまずはとらえておきたい。

一 これまでに指摘されていること

『落葉集』冒頭には次のような「序」が置かれている。

是つらの字書世にふりておほしといへどもあるは字のこゑ／ばかりにしてよみなく或はよみをしるしてこゑを記せず是なん／もの、不足といふべきにや茲に先達のもてあそびし文字／言句の落索を拾ひあつめかしらに母字を置きそれに／つゞく字を下にならべて字の音聲を右に記し讀を左に／して色葉集の跡を追ひいろはの次第をまなんで以て字／書をつくる仍此一冊を落葉集と号す又此書の終には／一字／のよみを本としおなじく二三字の世話をも少々／相加へて今一篇のいろはをついづる者也凡可謂萬

戸之賜歟（ゝ）は改行箇所

右の言説中の「字の音聲」を「音^{おん}」、「字の」讀」を「訓^{くん}」とごく一般的な用語を使って理解することにした。例をあげて説明をする。傍点は稿者が施した。

温（右うん／左あたゝか）ぬるし（落・う部…二十三丁裏
七行目）

温（右ぬるし／左うん）あたゝか・たづぬ（色・ぬ部…四
丁裏一行目）

温（右うん／左ぬるし）たづぬ・あたゝか（小・水部…五
丁表六行目）

「右うん／左あたゝか」は単漢字「温」の右振仮名に「うん」、左振仮名に「あたゝか」とあることを示している。そして「温」字の下に「ぬるし」とある。これを便宜的に「字下訓」と呼ぶことにする。この「字下訓」に関して「序」は何も述べていない。字下訓は複数置かれている場合があるが、置かれている位置によってなんらかの「順」があるかどうかが不分明なので、字下訓は右から左によりとり、それを「・」で区切って縦に並

べて表示する。字下訓が二段にわたっている場合は、まず上段、次に下段を示すが、上段と下段との別は表示しないことにする。「色葉字集」「小玉篇」も同じように単漢字の左右に振仮名を施し、字下訓を置く。「落葉集」「色葉字集」の右振仮名は、求める漢字を探すための「検索キー」になっている。

本稿では、『落葉集』の訓を観察対象とするが、訓は「落葉集左振仮名・字下訓」「色葉字集右振仮名・字下訓」「小玉篇左振仮名・字下訓」にあらわれる。

山田俊雄は「漢字の定訓についての試論―キリシタン版落葉集小玉篇を資料にして―」（『成城國文學論集』四、一九七二年）において、「任意に選り出した若干の字についてみると、本篇の左旁訓と、小玉篇の左旁訓との間には、やはり、その単字の定訓といふべきものを共通に持つといふ関係が、多少の例外は存しても、確認できるかと予見される。また小玉篇の左旁訓と、色葉字集の右旁訓との間にも、多く同一のものが採られるといふ傾向があることを予見しうる」（二五四頁）、「単字の右旁もしくは左旁に位置する訓は、いはば定訓（標準的な訓）」として示されたものと見て大過ないと云ひうる（二五五頁）と述べる。

「本篇」は本稿でいうところの「落葉集」、「左旁訓」は「左

振仮名」にあたる。「任意に選出した若干の字」は「小玉篇」の標目になつてゐる単字で、多数の訓をもつもの」で「三訓以上のものの中から任意に選んだ」十三字(悪・安・意・羽・介・好・寒・行・苦・嬌・齋・齊・像)を指す。「単字の右旁」は「色葉字集右振仮名」(、單字の)「左旁」は「落葉集・小玉篇左振仮名」を指すので、山田俊雄(一九七二)は「色葉字集右振仮名・落葉集・小玉篇の左振仮名に位置する訓は定訓(標準的な訓)として示されたものと見て太過ない」と述べていると理解することが出来る。

例えば「縦」字は「色葉字集」(七丁裏五行目)においては、「たとひ」が右振仮名、「たて・ほしひま、」が字下訓となっている。しかし、「落葉集」(五十三丁表一行目)においては「たて」が左振仮名、「ほしひま、たとひ」が字下訓となっている。また、「小玉篇」(八丁表三行目)においては、「たとひ」が左振仮名、「ほしひま、たて」が字下訓となっている。つまり、「色葉字集右振仮名」と「落葉集・小玉篇の左振仮名」とがつねに一致しているわけではない。定訓を複数認めるのであれば、「縦」字は「たとひ」(色葉字集右振仮名・小玉篇左振仮名)と「たて」(落葉集左振仮名)とを定訓とする、と認めることになる。そのような考え方も成り立つので、山田俊雄(一九七二)

の言説をそのようなものと理解することもできる。しかし、訓を「検索キー」として「色葉字集」において「たとひ」から「縦」字にたどりつくようになってくることの意味合いは重視したい。本稿ではそのことについても以下で検討をしたい。

二 『落葉集』の訓

二・一 「定訓」抽出の手順

先に述べたように、「落葉集」の訓は「落葉集左振仮名・字下訓」「色葉字集右振仮名・字下訓」「小玉篇左振仮名・字下訓」にあらわれる。『落葉集』の体例とともに、それぞれの訓について整理しておく。

「字の音聲を右に記し讀を左に」する「落葉集」においては、それぞれの單漢字の「音聲」すなわち「音」の仮名書き形の頭字によって「いろは四十四部」に収められている。

○泰(右たい／左たいらか) ＊平(右へい／左たいらか)
 一山(右さん／左やま) 一府君(右ぶくん／左もときみ)(落葉集十八丁表七行目)

右の例であれば、まず「音」の仮名書き語形「たい」によって「た部」にあたり「泰」を探し出す。この「たい」が検索キーとして右振仮名になっている。まずは単漢字「泰」が○の下に示され、訓「たいらか」が左振仮名として施されている。「*」に続いて、「泰」字を頭字にする語（以下、便宜的に「熟語」と呼ぶことにする）が「泰平」「泰山」「泰山府君」と並べられている。その熟語を構成する漢字一字一字にも訓が左振仮名として施されている。「府君」は「山府君」とあるべきところで、この箇所は「落葉集之違字」に採りあげられている。「泰山府君」は中国の神名、固有名詞であるので、「泰山府君」全体に語義があるわけではない。したがって、「府」「君」の左振仮名は、熟語全体の語義を考え併せて施されているのではなく、「府」「君」の訓をいわば機械的に施したものと考えるしかない。しかしこうした固有名詞ではない場合は、熟語の語義を勘案して、左振仮名が施されることはある。このことについて、山田俊雄（一九七二）は、「行」を例として「すで」「悪」「安」などの場合に感じられたやうに熟語の成分としての意味が、左旁訓に反映する様に附訓した態度がや、明確になつてゐることである。その点を考慮すると、左旁訓は、たゞ造語成分の字の唯一の定訓を、いつも公式的に適用するやうなものではないと判ぜ

られる」（二五一頁）と述べる。

そうであれば、「落葉集左振仮名」としては、「*」以下に並べられた熟語の頭字として熟語の語義とは切り離されている、「○」直下に置かれた単漢字に施された左振仮名をまずは観察対象とすべきであろう。

「色葉字集」においても右振仮名が「検索キー」となっている。その右振仮名が「訓」であり、右振仮名として示された「訓」によって求める漢字にたどりつくようになってゐるのだから、この「色葉字集右振仮名」が「その字を指し示すに援用できて、十分その機能がみとめられるレベルに達してゐる語」「その字の定訓」（山田俊雄 一九七二・五頁）である可能性がたかい。「小玉篇」においても右振仮名が「検索キー」となっている。「小玉篇」の右振仮名は「音」であるので、検索に関しては「落葉集」と同じである。ただし、「小玉篇」は単漢字が見出しとなっているので、左振仮名となつてゐる「訓」は単漢字に対してのものともみることができ、その意味合いでは「落葉集」の「○」の直下に置かれた単漢字と同じとみることができる。「字下訓」は「落葉集」「色葉字集」「小玉篇」いずれにもみられるが、すべての字に置かれてゐるわけではない。ここまで整理したことからすれば、『落葉集』の訓の中から、

山田俊雄(一九七二)が主張するような意味合いでの「定訓」を抽出するためには、次のような「手順」が考えられる。

一 「色葉字集」の右振仮名となっている。

二 「落葉集」の「○」直下に置かれた漢字の左振仮名となり、「小玉篇」の左振仮名となっている。

三 「落葉集」の左振仮名に多く出現する。

三は、量的な観点ともいえるが、そればかりではない。先に述べたように、「落葉集」は熟語を収めている。「落葉集」に収められている熟語が「日本語の歴史」に照らしてどのようなものであったか、という検証はなされていないと覚しい。したがって、ここではごく一般的に、『落葉集』が編まれた時期までに使われた熟語とみることにする。その熟語の語義を理解するためには、いろいろな「方法」があるが、熟語を構成する漢字の字義を考えるという「方法」が想定できる。さらに、「漢字の字義」は訓を媒介に理解されることが多いことが推測できる。漢字と結びついている訓があつて、その訓を媒介にして熟語の語義を理解する、と考えた場合、まず「漢字と結びついている訓」があることになる。これが「定訓」(にちかい)訓といえよう。しかしまた、そうした「定訓」が形成されるためには、

当該漢字及び当該漢字を含む熟語が言語生活において使われているということが前提となる。めつたに使われることがない漢字は「定訓」をもちにくい。つまり、熟語の使用頻度と「定訓」の成立は無関係ではない。一つの漢字Xが複数の字義Ⅱ語義と対応することはある。字義Aと対応する漢字Xを構成要素とする熟語が十、字義Bと対応する漢字Xを構成要素とする熟語が十、「落葉集」に収められていた場合、字義Aに対応する訓と字義Bに対応する訓とが拮抗することが予想される。しかし、字義Aと対応する漢字Xを構成要素とする熟語が十九、字義Bと対応する漢字Xを構成要素とする熟語が一であった場合、訓の出現は偏る。

したがって、「落葉集」の左振仮名に出現する訓は「落葉集」がどのような語義の熟語を多く収めているかということに左右されるとまずは考えるべきであるが、右で述べたように、そのことが「定訓」とは無関係ではないとすれば、三番目の観点として置くことは許されるであろう。

二・二 具体例による「定訓」抽出

まず「クラシ」を例とする。「クラシ」は三十一箇所において使われているが、その中に「色葉字集違字少々」において「闇」

(右やみ／左あん／字下訓からず)(十二丁裏九行目)の「からず」を「くらし」に訂正するもの、「落葉集」三十八丁裏三行目の「暗(右あん／左くらし)ー々」の「々」の左振仮名「く」、四十五丁表六行目「瞑々」の「々」の左振仮名「く」の三箇所を除いて二十八箇所について整理を試みることにする。挙例の順は原則として註1に示した「総索引」に従っているが、調整した箇所がある。

〔色葉字集右振仮名〕

暗 (右くらし／左あん) むなし・そら
 十二丁表四行目
 昧 (右くらし／左まい) くらます
 十二丁表四行目
 瞑 (右くらし／左めい)
 十二丁表四行目
 冥 (右くらし／左みやう)
 十二丁表四行目

〔落葉集左振仮名〕

○暗 (右あん／左くらし)
 三十八丁裏三行目
 遠暗 (右あん／左くらし)
 五十三丁裏八行目
 愚暗 (右あん／左くらし)
 二十七丁表一行目
 玄暗 (右あん／左くらし)
 三十丁裏六行目
 癡暗 (右あん／左くらし)
 九丁裏二行目
 瞑暗 (右あん／左くらし)
 四十五丁表六行目

○瞑 (右めい／左くらし)

沈瞑 (右めい／左くらし)
 九丁裏七行目

暗瞑 (右みやう／左くらし)
 三十八丁裏四行目

晦瞑 (右めい／左くらし)
 二十六丁表五行目

○冥 (右みやう／左くらし)

不昧 (右まい／左くらし)
 四十五丁裏七行目
 三十一丁裏五行目

〔小玉篇左振仮名〕

瞑 (右めい／左くらし)
 一丁表二行目
 暗 (右あん／左くらし) そら・むなし
 一丁表二行目
 闇 (右あん／左くらし) やみ
 十四丁裏五行目
 昧 (右まい／左くらし) くらます
 一丁表三行目
 冥 (右みやう／左くらし)
 十二丁裏一行目

〔色葉字集字下訓〕

陰 (右かげ／左いん) くらし・くもる・かくる、

霧 (右きり／左む) くらし・おぼつかなし
 六丁表七行目

蒙 (右かうむる／左もう) くらし・ほれらく
 十八丁表一行目

〔小玉篇字下訓〕

六丁表四行目

陰 (右いん／左かげ) かくる・くらし・くもる

七丁表三行目

宵 (右せう／左よる) くらし・よる

十二丁裏三行目

蒙 (右もう／左かうむる) くらし・ほれらく

十三丁表八行目

幽 (右ゆう／左かすかなり) とをし・くらし

十二丁裏五行目

右を漢字ごとに整理してみる。略号を使う。

暗 色右 1・落左単独 1・落左 5・小左 1

昧 色右 1・落左 1・小左 1

瞑 色右 1・落左単独 1・落左 4

冥 色右 1・落左単独 1・小左 1

闇 小左 1

陰 色字下 1・小字下 1

霧 色字下 1

蒙 色字下 1・小字下 1

宵 小字下 1

幽 小字下 1

先に設定した「定訓」抽出の「手順」からすれば、一の「色

葉字集」の右振仮名になっているものは、「暗・昧・瞑・冥」の四字。これらのうちで、「落葉集」の「○」直下に置かれた単漢字の左振仮名となつてゐるものが「暗・瞑・冥」三字で、この三字は「小玉篇」の左振仮名にもなつてゐる。三についていえば、「暗」が五回、「瞑」が四回で、「落葉集」の左振仮名として「くらし」を施されていない。「手順」に従えば、「くらし」は「暗」と「瞑」との「定訓」ということになる。

次に「タヲヤカ」を例とする。『落葉集』全体で「タヲヤカ」は九箇所のみられる。

【色葉字集右振仮名】

嬌 (右たはやか／左けう) こぶる・おこる 七丁裏七行目

嬋 (右たをやか／左せん) かほよし・よし 七丁裏七行目

嬋妍 (右たをやか) 八丁表七行目

优々 (右たをやか) 八丁表七行目

【落葉集左振仮名】

○嬌 (右けう／左たをやか) おこる 二十九丁裏三行目

〔小玉篇左振仮名〕

嬋（右せん／左たをやか）よし

二丁表三行目

〔色葉字集字下訓〕

嬋（右かほよし／左せん）よし・たをやか

六丁表七行目

弱（右よし／左じやく）たほやか

七丁表七行目

〔小玉篇字下訓〕

嬌（右けう／左をぐる）こぶる・たをやか

二丁表四行目

嬌 色右1 落単独左1 小字下1

嬋 色右1 小左1 色字下1

弱 色字下訓1

今二字漢字列「嬋妍」「优々」については措く。單漢字でいえば、「色葉字集」の右振仮名が「たをやか（たほやか）」となっているのは「嬌」「嬋」の二字。ただし「嬋」は右振仮名「かほよし」からも採し当てることができる。すなわち「た部」「か部」に双掲されている。「落葉集」の「○」直下で左振仮名「たをやか」を施されているのは「嬌」字で、稿者の「手順」からは「たをやか」と強く結びついているのは「嬌」といえるであろう。山田俊雄（一九七二）は「小玉篇」の「嬌」字において、

「をぐる」が左振仮名で、「たをやか」が字下訓になっていることについて、「逆にあるべきかと思はれる」（二五二頁）と述べている。「おぐる」は「色葉字集」「落葉集」とともに、一例ずつではあるが、字下訓として置かれている。

稿者は「色葉字集」において檢索キーとして機能する右振仮名を重視したい。そのことからすれば、「嬋」字の「定訓」も「たをやか」ということになる。ただし、「かほよし」からも「嬋」字にたどりつくことからすれば、「嬋」字にとつては「かほよし」も「定訓」ということになる。そうだとすると、「たをやか（たほやか）」を「定訓」とする單漢字は「嬌」と「嬋」の二字、「嬋」は「たをやか」と「かほよし」を「定訓」とすることになる。

ここで「定訓」の定義が問題になる。すなわち、ある和語がある漢字の「定訓」であるとして、その和語は他の漢字の「定訓」にはならないのか、ということと、一つの漢字には「定訓」は一つしかないのか、ということである。

山田俊雄（一九七二）は「定訓」について次のように述べている。

一…某一字について、その呼称を考へる時に、直ちに喚起される字訓を、先づ第一にその字の定訓（またはその一つ）に擬

することが許されるであらうと考へる。

二・その字を指し示すに援用できて、十分その機能がみとめられるレベルに達してゐる語 を、その字の定訓といふことができるよう。

一には「その字の定訓（またはその一つ）」とあるので、山田俊雄（一九七二）はある漢字が定訓を二つもつということを認めていると思われる。現代日本語の例でいえば、「常用漢字表」は「触」字に「ふれる」「さわる」二つの訓を認めている。「ふれる」という字「さわる」という字 いずれも「触」を想起するのであれば、この「ふれる」「さわる」が「触」字の二つの定訓ということになる。

また、「足」の「呼称を考へる時に、直ちに喚起される字訓」が「あし」で、「葦」の「呼称を考へる時に、直ちに喚起される字訓」が「あし」であれば、「あし」は「足」の定訓であると同時に「葦」の定訓でもある。これはいわゆる「異字同訓」という現象にあたるが、二は「その字を指し示すに援用でき」ることのみを述べているので、山田俊雄（一九七二）の「定訓」の定義には「異字同訓」はかかわっていないと思われる。

過去の日本語を素材として、「定訓」について考えるにあたり

ては、最終的には、右で述べた「一つの漢字が二つの定訓（めいた訓）をもつこと」と「異字同訓」を含めて、「動的な漢字使用」を説明する必要があると考える。

稿者が提示した「定訓」抽出の「手順」によって具体的に「定訓」を考えてきた。先に「暗」「瞑」二字が「くらし」を定訓としていると推測した。「暗」字についていえば、「色葉字集」と「小玉篇」の字下訓に「そら」「むなし」の二訓が置かれている。「くらし」が「定訓」であるならば、この「そら」「むなし」はどのように位置づければよいか、ということが本稿でのもう一つのテーマである。

三 定訓ではない訓をどう位置づけるか

先に採りあげた「暗」においては、「色葉字集」に「暗（右くらし／左あん）むなし・そら」（十二丁表四行目）、「小玉篇」に「暗（右あん／左くらし）そら・むなし」（二丁表二行目）と字下訓が置かれていた。この「そら」「むなし」について考えてみたい。まず「そら」「むなし」が『落葉集』全体にどのように出現しているかについて整理する。「そら」は『落葉集』全体で七十一回つかわれている。「そら」と記されず「く」

が使われている三回を除いて、合計六十八回のうちわけは次のようになっている。

〔色葉字集右振仮名〕

虚（右そら／左きよ）うつけたり・むなし・いつはる

八丁裏二行目

空（右そら／左くう）むなし・うつけ

八丁裏二行目
八丁裏三行目

天（右そら／左てん）あめ

〔落葉集左振仮名〕

俗漢（右かん／左そら）

風顛漢（右てんのかん／左たほる、そら）

大虚（右きよ／左そら）

○虚（右こ／左そら）むなし、

壊空（右くう／左そら）

外空（右くう／左そら）

玄空（右くう／左そら）

秋空（右くう／左そら）

大空（右くう／左そら）

長空（右くう／左そら）

晴空（右くう／左そら）

○天（右てん／左そら）あめ

晴天（右てん／左そら）

半天（右てん／左そら）

一天（右てん／左そら）

雨天（右てん／左そら）

温天（右てん／左そら）

炎天（右てん／左そら）

江天（右てん／左そら）

高天（右てん／左そら）

寒天（右てん／左そら）

九天（右てん／左そら）

仰天（右てん／左そら）

九天（右てん／左そら）

廻天（右てん／左そら）

廣天（右てん／左そら）

月天（右てん／左そら）

下天（右てん／左そら）

暁天（右てん／左そら）

五天（右てん／左そら）

西天（右てん／左そら）

早天（右てん／左そら）

五十七行裏二行目

三丁裏六行目

二丁表二行目

二十三丁裏六行目

二十四丁表一行目

五十四丁表七行目

十七丁表三行目

十六丁裏一行目

十五丁表六行目

四十三丁裏一行目

四十四丁表五行目

二十四丁裏二行目

二十六丁表二行目

二十五丁表三行目

二十七丁表一行目

三十丁表八行目

二十九丁表八行目

三十五丁裏一行目

三十九丁表四行目

四十丁表八行目

蒼天 (右てん／左そら)	四十丁表四行目
三天 (右てん／左そら)	三十九丁裏七行目
秋天 (右てん／左そら)	五十丁表四行目
上天 (右てん／左そら)	四十九丁表五行目
生天 (右てん／左そら)	四十九丁表二行目
青天 (右てん／左そら)	五十七丁表四行目
大六天 (右ろくてん／左むつそら)	十九丁裏二行目
倒天 (右てん／左そら)	十九丁表二行目
中天 (右てん／左そら)	十一丁表五行目
通天 (右てん／左そら)	二十一丁裏一行目
朝天 (右てん／左そら)	三十七丁表五行目
東天 (右てん／左そら)	八丁表八行目
南天 (右てん／左そら)	二十二丁表三行目
二天 (右てん／左そら)	五丁表六行目
白樂天 (右らくてん／左たのしむそら)	三丁表八行目
八天 (右てん／左そら)	四丁表二行目
晩天 (右てん／左そら)	四丁裏五行目
普天 (右てん／左そら)	三十一表六行目
暮天 (右てん／左そら)	六丁裏八行目
北天 (右てん／左そら)	六丁表七行目

梵天 (右てん／左そら)	七丁表六行目
落天 (右てん／左そら)	二十二丁表八行目
冷天 (右てん／左そら)	二十丁表三行目
〔小玉篇左振仮名〕	
空 (右くう／左そら)	うつけたり・むなし
	十二丁表八行目
〔落葉集字下訓〕	
○虚 (右きよ／左むなし)	そら
	四十二丁表六行目
○空 (右くう／左むなし)	そら・あだなり
	二十四丁裏六行目
〔色葉字集字下訓〕	
暗 (右くらし／左あん)	むなし・そら
	十二丁表四行目
漠 (右もろこし／左かん)	そら・あまのがは
	二十一丁裏三行目
空 (右むなし／左くう)	そら・うつけたり・うつほ
	十丁裏二行目
〔小玉篇字下訓〕	
暗 (右あん／左くらし)	そら・むなし
	一丁表二行目
宇 (右う／左あめ)	いゑ・そら
	十二丁表一行目
漢 (右かん／左もろこし)	そら・あまのがは
	五丁表四行目

虚（右きよ／左むなし）ひろし・うつけたり・あやし・いつはり・そら
十四丁表四行目

漢字ごとに整理する。

虚5 色右1＋落単独左1＋落左1＋落字下1＋小字下1
空11 色右1＋落左7＋小左1＋落字下1＋色字下1
天45 色右1＋落単独左1＋落左43
漢4 落左2＋色字下1＋小字下1
暗2 色字下1＋小字下1
宇1 小字下1

「色葉字集」において右振仮名「そら」からたどりつける字は「虚」「空」「天」の三字。このうち「落葉集」において単独掲出された箇所において左振仮名となっているのは「虚」「天」の二字。この二字が「そら」を定訓としているとみたい。「そら」は「落葉集」において「天」の左振仮名として四十三回出現しているが、これは右に示したように、「天」を下字とする熟語が多く収められていることに起因する。このことを、「天」を下字とする熟語は、文字社会を限定しなくとも、ひろく使われ

ていたことの反映とみるのであれば、そのことをもって、「そら」は「天」の定訓とみることはできる。しかし、文字社会を限定しなくともそうであったかどうかについては現時点では検証ができていない。これは、そもそも『落葉集』に収められている熟語（漢語）がどのような漢語であるかという「みとおし」の中に含まれることがらであり、今後の研究課題といえよう。⁽¹⁾
「落葉集」において単独掲出された「空」の左振仮名は「むなし」でそこでは「そら・あだなり」が字下訓になっている。「暗」と「そら」との結びつきは「色葉字集」「小玉篇」の字下訓にしかみられない。
「むなし・むなしし」は『落葉集』全体で二十二回使われている。「く」が使われている三例を除く。

「色葉字集右振仮名」

虚（右むなし／左きよ）うつくる・そら 十丁裏二行目
空（右むなし／左くう）そら・うつけたり・うつほ

十丁裏二行目

「落葉集左振仮名」

○虚（右きよ／左むなし）そら 四十二丁表六行目
空虚（右きよ／左むなし） 二十四丁裏六行目

氣虚 (右きよ／左むなし)

四十一丁裏二行目

○空 (右くう／左むなし) そら・あだなり

二十四丁裏六行目

真空 (右くう／左むなし)

四十七丁表七行目

前空 (右くう／左むなし)

五十九丁裏七行目

脱空 (右くう／左むなし)

十九丁裏五行目

眼空 (右くう／左むなし)

十六丁表七行目

〔小玉篇左振仮名〕

虚 (右きよ／左むなし) ひろし・うつけたり・あやし・そら

十四丁表四行目

〔落葉集字下訓〕

○虚 (右こ／左そら) むなし、

三十四丁表二行目

〔色葉字集字下訓〕

暗 (右くらし／左あん) むなし・そら

十二丁表四行目

虚 (右そら／左きよ) うつけたり・むなし・いつはる

八丁裏二行目

空 (右そら／左くう) むなし・うつけ

八丁裏二行目

〔小玉篇字下訓〕

暗 (右あん／左くらし) そら・むなし

一丁表二行目

空 (右くう／左そら) うつけたり・むなし

十二丁表八行目

唐 (右たう／左から) むなし・もろこし 十四丁表一行目
 窠 (右る／左やつす) いやし・むなし 十二丁表六行目

字ごとに整理する。

虚7 色右1 + 落単独左1 + 落左2 + 小左1 + 落字下1 + 色

字下1

空8 色右1 + 落単独左1 + 落左4 + 色字下1 + 小字下1

暗2 色字下1 + 小字下1

唐1 小字下1

窠1 小字下1

「むなし」が「色葉字集」の右振仮名、「落葉集」の単独箇所
 の左振仮名になっているのは「虚」「空」で、「むなし」はこの
 二字の定訓とみてよいと考える。先には「虚」「天」の二字。
 この二字が「そら」を定訓としてみると「そら」と述べたが、
 このこととを考えれば、「虚」は「むなし」と「そら」とを
 定訓とし、「空」は「むなし」を定訓としてことになる。『落
 葉集』全体の状況としていえば、「虚」のように二つの定訓を
 もつ単漢字があり、「むなし」のように二種類の単漢字と結び

つく定訓があることがわかる。

そこで「暗」字の「色葉字集」字下訓、「小玉篇」字下訓として置かれている「むなし」「そら」について改めて考えてみたい。

山田俊雄（一九七二）は註3に引いたように、「嬌」字と「ヲゴル」との結びつきに関して「この落葉集のみの独自の記事ではない」と述べる。そこでは具体的な文献名が示されていないが、例えば、観智院本『類聚名義抄』には「嬌」字（仏中七丁裏四行目）に「オゴル」「コビ」「コフル」の和訓が配されているし、三卷本『色葉字類抄』を篇「人事部」では「傲」字に「ヲゴル」と附訓し、以下二十四の漢字を並べるが、その中に「嬌」字も含まれている。さらには、寛元本『字鏡集』においても「嬌」字に「コソル」「ホシマ、」「コヒタリ」「タヲヤカ也」「カタマシ」「コヒ」「イツハル」「コハム」「ヲコル」「シナ」の和訓が配され、天文本『字鏡抄』においても「嬌」字に「ヨソル」「ホシマ、」「コヒタリ」「ヲコル」「コハム」「シナ」「カタマシ」の和訓が配置されている。あるいは、慶長十五年版『倭玉篇』においては「嬌」字に「コビタリ」「ヲゴル」「コブル」「タヲヤカ」「コフ」「カタマシ」「イツル」七つの和訓が配されているが、その中に「ヲゴル」が含まれている。

右のようなことを考え併せれば、「落葉集」「け部」に単独掲出された「嬌」字（二十九丁裏三行目）の字下訓、「色葉字集」「た部」に掲出された「嬌」字の字下訓として置かれている「おごる」は「錯誤」ではなく、「伝統的な和訓」とみるべきであろう。

「定訓」は、漢字と和訓との結びつきの「歴史」の中で形成されていくとみるのが自然であろう。そう考えると、「伝統的な和訓」の中に「定訓」となる和訓があることも自然であろう。そうであれば、「伝統的な和訓」の中に「定訓」にはならなかった和訓があることもまた当然のことになる。「嬌」字に関していえば、「伝統的な和訓」の中の「タヲヤカ」が「定訓」となり、「オゴル」は「定訓」にはならなかった。そしてその「オゴル」が字下訓として置かれていることになる。

ある時点で「定訓」と呼べるようになった和訓が、その後「定訓」の位地を他の和訓に譲ることはあろう。しかしまた、いったん「定訓」と呼べるようになった和訓が、その後もずっと「定訓」の位地にあり続けるということも少なからずあることが推測される。ある時期の「定訓」（と呼べそうな和訓）が一定の手続きによって抽出できるとすれば、次には「定訓の消長」が明らかにすべき課題となる。そして「定訓の消長」を含んだ「和

訓の歴史」を「字訓史」として記述することがさらなる課題となると考える。

「色葉字集」と「小玉篇」が「暗」の字下訓として置く「そら」「むなし」について具体的に考えてみたい。Gは「穴+中」Hは「貝×貝」「丁」は「言×甘」(+はその前後の構成要素が上下になっていること、×は左右になっていることを示す)。

1暗 クラシ ヤミ ソラ ムナシ ホノカナリ ヨル (観智院本『類聚名義抄』仏中四十七丁裏五行目)

2空 虚 宵 穹 暗 豁 諳 G H 天 漢 已上同 (尊経閣文庫蔵二巻本『色葉字類抄』そ篇・天象部…三十二丁表)

3暗^{ソラ} (尊経閣文庫蔵二巻本『色葉字類抄』そ篇・辞字部)

4暗^{アム} ホノカナリ ヲノツカラ ムナシ ソラニ ヨル クラ

シ ソラ ヤミ (寛元本『字鏡集』巻一・三「日部」)

5暗^{アム} ホノカナリ ヲノツカラ ムナシ ソラニ クラシ ヨ

ル ヤミ ソラ (天文本『字鏡抄』巻一・三「日部」)

6暗 クラシ (『玉篇要略集』上巻「日部第三」)

7暗^{アム} クラシ (岡田希雄旧蔵写本「玉篇」第一「日」)

8暗^{アム} クラシ (東京大学国語研究室蔵「伊勢家本」「玉篇」「日

第一」)

9暗^{アム} ホノカ也 ヲノツカラ クラシ ヤミ クル、(弘治二年写『和玉篇集』巻第二)

10暗 クラシ ムナシ ヨル (内閣文庫蔵本『篇目次第』第二十七「日部」)

11暗^{アム} クラシ ムナシ ソラ (国立国会図書館蔵「拾篇目集」「日第一」)

12暗 ムナシ ヨルナリ ソラ ヤミ クラシ ホノカナリ (黒川文庫本『音訓篇立』天上第一日篇…第一冊二丁裏三行目)

13暗^{アム} クラシ ヤミ (米沢文庫蔵「和玉篇」「日第一」)

14暗^{アム} 於丁反 クラシ (『玉篇略』上、「日第一」)

15暗^{アム} クラシ ヤミ ソラ (夢梅本「倭玉篇」「日第一」)

16暗^{アム} クラシ ヨル (古活字版『和玉篇』「日部」百六十三)

17暗^{アム} ソラニ クラシ ヤミ ソラ (東京大学国語研究室蔵永

禄六年写『類字韻』「日二百六十七」)

18暗^{アム} クラシ ソラニ ヤミ (慶長十五年版「倭玉篇」「日

二百六十八」)

19暗^{アム} クラシ ソラニ ヤミ (慶安四年刊『新編和玉篇』中巻「三百四 日部」)

20 暗^{アツ} クラシ ソラニ ヤミ（慶安五年刊『新刊倭玉篇』巻中

「三百四 日部」

21 暗^{アツ} クラシ ソラニ ヤミ（寛永九年刊『倭玉篇』巻中「日

部 三百四」

22 暗^{アツ} クラシ ソラニ ヤミ（慶長頃刊『倭玉篇』巻下「日

二百六十八」

まず、『落葉集』において「暗」の定訓になっていると思われる「クラシ」を示さないものはない。4・5はいわゆる「和玉篇」につながる辞書体資料で、6・22は「和玉篇（倭玉篇）」である。6・7・8は見出しとしている漢字に配する和訓が少ないが、一つしか示さない和訓が「クラシ」であることは、やはり「クラシ」が「暗」の定訓となっていることを窺わせる。

まずは「漢字活字の総見本帳」である『落葉集』の内部がどのようなになっているか、ということをも『落葉集』以外の辞書体資料とは別に確認する必要がある。しかし、室町時代の日本語を観察する文献として『落葉集』を使うのであれば、適切な「方法」によって、同時代、また先立つ時代の文献と対照する必要がある。6・7・8のような、少数の和訓のみを掲げる「和玉篇」との対照という「方法」を一つ加えるだけで、考察できる

範囲はひろくなる。

黒川本『音訓篇立』は多くの和訓を示しているが、その他の「和玉篇」は三乃至四の和訓を示している。10・12には「ムナシ」が示されているが、13以下には「ムナシ」が示されていない。10・22において複数訓を掲げているのに「ソラ／ソラニ」を示さないのは、10・13・16のみで、「ソラ」との結びつきは確認しやすい。

『落葉集』と同じように「暗」と「クラシ」「ソラ」「ムナシ」とを結びつけているのは11の「拾篇目集」である。「拾篇目集」は「日・月・火・水・木・金……」という部首配列を採る。『落葉集』「小玉篇」は「日・月・人・女・目・耳……」という部首配列を採っており、「大きくいつてこの類（引用者補）「日・月」から部首配列が始まる類のこと」に属する」（中田祝夫「倭玉篇解説」『倭玉篇慶長十五年版研究並びに索引 影印篇索引篇』一九八一年、勉誠社）というみかたもあるが、『落葉集』を「和玉篇」と系譜的に結びつけることについては慎重に考えたい。

おわりに

本稿においては、まず、これまで具体的な手順が示されてい

なかった、『落葉集』における「定訓」抽出の「方法」について、『色葉字集』の右振仮名と「落葉集」において、単独掲出されている見出しの左振仮名になっていることを重視した、具体的な手順を提言した。

次に、その手順に従って、「定訓」を抽出し、「定訓」以外に、例えば字下訓として示されている訓がどのようなものであるかについて検討した。そうした訓は、例えば観智院本『類聚名義抄』、『色葉字類抄』『字鏡抄』『字鏡集』『和玉篇』といった辞書に登載されている「伝統的な訓」であることを確認した。

『落葉集』とはほぼ同じ時期に編まれたと覚しい、『和玉篇』と対照することで、『落葉集』の訓がどのようなものであるかを窺うことができる。本稿は、『落葉集』には十六世紀末頃に「定訓」となっていたと目される訓Ⅱ当代訓と、訓としてずっと辞書体資料に登載されてきているが、「定訓」にはならなかった「伝統的な訓」との「二つの訓」がとりこまれていることを指摘することができたと考える。

論文の題を「『落葉集』の二つの訓」とした。ある漢字と結びついている複数の「伝統的な訓」の中に「定訓」と呼べるような訓があることは自然なことであろう。そしてそうであれば、「伝統的な訓」の中に「定訓」にならなかった訓」があるのも当

然ということになる。それが「二つの訓」であるが、ある時期について、どのような訓が「定訓」になっているか（実際には定訓になっている蓋然性がたかいか）ということは何らかの「手順」によって、ある程度の確かさをもって示すことは容易ではない。本稿では先学の驥尾に付しながら、その「手順」を示した。また、「二つの訓」というとらえ方は、どちらかといえば「共時的」なとらえ方といえよう。「二つの訓」を「通時的」にとらえると、「訓の層」ということになる。訓が地層のように層を成して蓄積している、というとらえ方が日本語における訓のとらえ方として有効であるかどうかについては、今後さらに考えていきたい。

註

- (1) 土井忠生は「落葉集考」(『國文學攷』第一卷第一輯、一九三四年、後一九四二年、靖文社刊『吉利支丹語學の研究』再収、引用は後者による)において、「小玉篇を持たない落葉集が存するのによつて、小玉篇が落葉集の中に於いて分離性を有することが認められる。この事は三部が完備した落葉集の次の如き事實からも認められる。即ち、先づ書中に序が二箇所に載せてある。一つは巻頭にあつて、「此書の終に」色葉字集を添へると言ひ、全然小玉篇の事には觸れてなく、落葉集と色葉字集とのみ關するものである。今一つは小玉篇の初にあつて、

落葉集と色葉字集とだけでは未だ不便があるので更に小玉篇を加へた所以を明かにしたものである。その上にまた、色葉字集に附載した百官及び國盡最後の丁の終行に、國盡之終と記し、その下端に55とあつて、小玉篇の終には何ら刊記を見ないのである」(四十三頁)と述べている。

(2) 『落葉集』のテキストとしては天理図書館善本叢書和尚部第七十六卷『落葉集二種』に影印として収められている、天理図書館蔵本を使用する。例の所在はこの天理図書館蔵本によつて示した。音・訓の檢索には、小島幸枝編『耶蘇会版落葉集總索引』(一九七八年、笠間書院)を使用した。学恩に感謝する。「總索引」はイエズス会本部蔵本に基づいて編まれている。

(3) 山田俊雄(一九七一)は「をこる」の訓は、字集で「嬌」及び「嬌」の左旁訓になつてゐるのを見ると、「嬌」に關しての「をこる」は色葉字集の記事に端を発する不統一と見ることができよう。たゞ、「ヨゴル」を「嬌」の訓の一つとすることは、この落葉集のみの独自の記事ではないから、速断はできない」(二五三頁)と述べている。

(4) 西崎亨編『日本古辞書を学ぶ人のために』(一九九五年、世界思想社の出版からすでに二十五年が経つ。出版の時点で、ということになるが、第二章「古辞書の歴史」第三節「室町時代の辞書」(一八二—二二三頁、萩原義雄執筆)においては、全四十一頁のうち、『落葉集』は「まとめ」直前の八行のみ。『落葉集』は、同書第三章「主要辞書各説」においても採りあげられており、ここでは五頁半が記述にあてられているが、『落葉集』の「世話熟語和訓」(三四〇頁上段)と「節用集」との対照に二頁半がさかれ、「漢語」という観点はみられない。

『参考文献』

- 今野真二 仮名文字遣からみた『落葉集』―「は」「わ」の場合―(一九九五年『国文学研究』第一二五集、後に、二〇〇一年、清文堂出版『仮名表記論攷』第二章第二節の五に改稿の上収める)
- 土井忠生 落葉集考(一九三四年『國文學攷』第一卷第一輯、後に一九四二年、靖文社『吉利支丹語學の研究』所収)
- 豊島正之 日本の印刷史から見たキリシタン版の特徴(二〇一三年、勉誠社『キリシタンと出版』所収)
- 西崎亨編『日本古辞書を学ぶ人のために』(一九九五年、世界思想社)
- 山田俊雄 漢字の定訓についての試論―キリシタン版落葉集小玉篇を資料にして―(一九七一年『成城國文學論集』四)